人間文化創成科学論叢　第25巻　2023年３月

草創期のバリアフリー絵本
―その成立史と解題―

攪　上　久　子*

The Early Period of Barrier-Free Picture Books
A History and Annotated Bibliography

KAKUAGE Hisako

Abstract

In Japan, barrier-free design of picture books devised to make it possible for children with disabilities to participate in the content of picture books and give them enjoyment began in the 1960s. When exactly did barrier-free picture books begin to be made in Japan and how? This study surveys the early period of barrier-free picture books and chronicles its history between 1960 and 2002. The backdrop of these activities can be found in the heightened awareness in society of the rights of people with disabilities in the run-up to the United Nations International Year of Disabled Persons in 1981. That increased awareness was clearly the result of the trial-and-error contributions of parents, families, and others involved with persons with disabilities to the development of handcrafted books through volunteer groups and private community libraries for children (*bunko*). Important in the area of published books are the efforts of publishers inspired by programs for published books observed overseas. The study confirmed that in the early period of barrier-free picture books earlier books directly connected to those made in the next phase.

keywords：Barrier-free picture book, Children with disabilities, Early period, History, Annotated bibliography

１．問題の所在と研究の目的

１．１　バリアフリー絵本とは何か

障害がある子どもたちに関する絵本は大きく二つに分けて考えることができる。「障害がある子どもたちのための絵本」と「障害が描かれている絵本」の二つである。これらの障害がある子に関する絵本を「バリアフリー絵本」と称する。「障害がある子どもたちのための絵本」には、バリアフリーデザインになっている絵本や、ユニバーサルなアクセスを持つ絵本がある。また「障害が描かれている絵本」とは、その絵本を通して障害（バリア）に出会い、学び、理解を進める絵本である。

バリアフリー絵本という名称は、今日よく耳にするようになってきているが、この名称の普及に貢献したのは、2003年から国内巡回展を開始した、「世界のバリアフリー絵本展」である[1]。この展示会では世界中から収集し、選書された「障害がある子どもたちのために特別に作成された絵本（Special Format）」、「障害がある子どもたちも楽しめる一般絵本（Universal Access）」、「障害が描かれている本（Portrait）」の３カテゴリーの図書が展示されてきた。

キーワード：バリアフリー絵本、障害がある子ども、草創期、成立史、解題

＊平成31年度生　人間発達科学専攻

バリアフリーとはもともとは建築学の専門用語バリアフリーデザイン（barrier free design）からきていることばで、日本では1981年の国際障害者年を契機に、福祉整備や、障害者の生活権拡大運動などとして一般に広まった。1995年に総理府が出した「障害者白書」には、障壁（バリア）は、①物理的障壁②制度的障壁③文化・情報の障壁④意識の障壁の４つがあり、それらすべてを取り除くことを「バリアフリー」と明示している（光野1998）。

バリアフリーということばと本をつなげた用語としては、1990年代頃から、〈バリアフリーブック〉（小学館）〈バリアフリーえほん〉（岩崎書店）〈子どものためのバリアフリーブック〉（大月書店）〈バリアフリーの本〉（偕成社）というシリーズタイトルがついた本の出版があった。いずれも、障害に関わるテーマの図書である。

なお、バリアフリー絵本と近似の絵本の呼称に、「ユニバーサルデザイン絵本（以後UD絵本）」がある。UD絵本は概念的には、ユニバーサルデザインの理念・定義「年齢や能力にかかわりなく、すべての生活者に対して適合するデザイン（ユニバーサルデザイン研究会2001）」に沿った絵本であろう。林（2011）は、UD絵本を「身体的・知的特性や年齢・文化を超えて一緒に楽しむことのできる絵本」と定義し、年齢や文化の多様性にも視野をおいている。またバリアフリー絵本には「障害がある子どもたちのための絵本」と「障害が描かれている絵本」の二つを含んで考えているが、UD絵本には、「障害が描かれている絵本」のほうは含まれない。障害がある子どもたちに関する絵本として「障害がある子どもたちのための絵本」と「障害が描かれている絵本」をバリアフリー絵本と考える。林（2011）は、「バリアフリー絵本とUD絵本は重なりをもちつつ、互いを補い合う存在」ともとらえているが、筆者も「障害がある子どもたちのための絵本」にみられるユニバーサルなアクセスを持つ絵本に関しては同様に考える。

１．２　バリアフリー絵本を必要とする子ども

絵本を見たり読んだりすることに、障害（バリア）がある子どもたちがいる。見ることに困難がある子どもたちや、言葉や文字や絵の理解に困難がある子どもたち、本をめくったり、さわったり、持ったりすることが難しい子どもたちもいる。バリアフリーデザインやユニバーサルアクセスの絵本は、そのような子どもたちが絵本を楽しむために必要とされる絵本である。

バリアフリーデザインになっている絵本には、現在日本では以下のような種類がある[2]。

・さわる絵本（手で見る絵本）

さまざまな触感の素材を貼り付けて絵を構成したものや、隆起印刷や点図で絵を描くものなどがある。ボランティアによる手作り絵本と、商業出版されている絵本とがある。

・てんやく絵本

文の点訳だけではなく、絵の形に透明シートを切り取って貼り、その絵の説明が点字で加えてある絵本[3]。ボランティアによる作成。

・布絵本

台紙が布で出来ていて、そこに様々な布・フェルトなどで作った絵を綴じ付けたもの。一部の絵がマジックテープ・ボタン・スナップ・ファスナー・ひもなどで、取り外しや移動ができ、とめる・はずす・くっつける・ひっぱる・むすぶ・ほどくなどの手指操作が、遊びながらできるように工夫されている。手指にマヒがあるよう場合は、頁のめくりやすさもある。障害がある子どものための本は、現状は殆どがボランティア団体による手作りである。制作団体によって、布の絵本・布えほん・布のえほん・布の本など、呼称は統一されていない。

・手話つき絵本（手話で読める絵本）

動画（DVD）を使って手話で語っている絵本や、イラストで手話が加えられている絵本が現在日本ではある。

・絵文字つき絵本

絵と文のほかに、絵文字などの非言語的コミュニケーションシステムで、単語や文の意味や概念が加えられている絵本。

また、絵本はメディアであり、絵本を通して異文化や多様な人の在り様を学ぶことができる。障害を適切に理解するための絵本や、障害をポジティブに描く絵本、インクルーシブな社会に向かう道筋を示していくような絵

本は、全ての子どもたちにとって必要なバリアフリー絵本である。

１．３　バリアフリー絵本の成立に関する先行研究

バリアフリー絵本はどのように誕生していったのか、その時期や内容が調査された成立史や通史はあるのだろうか。1975年布絵本を始めて作ったときのことが、ふきのとう文庫（1990）に記録がある。HPの公開資料で、年表「日本のバリアフリー図書の歩み」（国立国会図書館国際子ども図書館2005）があり、1876年から2005年までの児童向けバリアフリー図書と、図書館の障害者サービスのあゆみを事項として一望することができる。攪上（2006）は、バリアフリー絵本に関する初の論考といえ、それまで明らかになった日本のバリアフリー絵本の歩みを知ることができる。林（2012）は３章でバリアフリー絵本をとりあげ、バリアフリー絵本という表現が世界のバリアフリー絵本展の各地での開催で定着してきたとして、展示本や世界の資料情報も入れて、当時までの日本のバリアフリー絵本の概要について整理し、とりあげた絵本では成立年代やその状況にも触れている。ただ両論文の内容も成立史・通史が十分明らかにはされていない。攪上（2019）は、さわる絵本の、成立や開発のプロセスを、2019年時点まで更新して整理している。日本の絵本通史は、戦前までのものが多く、『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』（編：鳥越信、ミネルヴァ書房2001～2002）は、1990年代までの絵本史が記述されている[4]。そのⅢの中の「社会問題が絵本にある」という項（p197－199）に、『さっちゃんのまほうのて』（共同制作：たばたせいいち・先天性四肢障害児父母の会・のべあきこ・しざわさよこ、偕成社1985）『ボスがきた』（編：福井達雨、絵：竹内雅輝、文字：馬嶋克美、偕成社1980）『わたしいややねん』（文：吉村敬子、絵：松下香住、偕成社1980）の３冊が登場する。また1990年代の絵本の「メッセージを投げかける絵本」の項（p216）に「『バリアフリー』という言葉もずいぶん浸透した。当然のことながら、このテーマの絵本も現れる。」として『チョキチョキチョッキン』（作：岩田美津子・ひぐちみちこ、こぐま社発行1996）と写真絵本『ぼくのおにいちゃん』（写真／文：星川ひろ子、写真：星川治雄、小学館1997）が記述されている（鳥越2002）。

バリアフリー絵本の歴史に関しては、草創期（成立史）は十分明らかにされておらず、成立の順を追っての内容の記録も整理なされていない。特に日本の絵本史としては欠如していることがわかる。

１．４　問題の所在

絵本として存在がなかったものを、必要とする子どもたちのために創り出していった絵本がバリアフリー絵本である。しかし、その歴史、特に草創期の歴史（成立史）は十分明確でなく、筆者がバリアフリー絵本展を実行しながらオーラルヒストリーで得た情報はあっても、記録として残すには資料が十分に発掘されていない。また絵本は子どもにとって、自分が生きる社会を見る鏡であるが、障害がある子どもたちが、絵本の中に登場するようになったのはいつからなのかもはっきりとは明らかにされていない。障害がある子どもたちが、絵本の物語に自分が参加している、参加できるということは、社会を共に作り共に生きることのひとつの証である。まずバリアフリー絵本の草創期、どんな子どもたちのために、だれが、どのような理由から、どのように成立させていったのかということを明らかにすることは、共生社会への歩みの草創期をたどることでもある。

１．５　研究の目的と方法

本研究の目的は、バリアフリー絵本の草創期の成立史を明らかにすることである。日本におけるバリアフリー絵本の成立時期やその絵本の解題を調査する。さらにそれらの成立には、どんな関連や社会的な背景があったのか考察する。探求の対象は、1.2にあげたバリアフリー絵本である。これまで筆者がオーラルヒストリーでしかつかんでいなかった内容を文献・資料調査で検証するということも含め、文献資料調査を研究の方法とする。

２．バリアフリー絵本成立史調査結果

時代背景の影響として大きかった、1981年国連の国際障害者年で時代をひとつ区切る。

２．１　1960～1980年に成立したバリアフリー絵本

２．１．１　福来四郎の絵本制作と研究　1966年

福来四郎は1950年から1980年まで神戸市立盲学校で美術教育を担当し、目の見える者の概念を押し付けるアート指導ではなく、見えない者のイメージ・シンボルを尊重した指導をした。表面の形ではなく内面を形にするという粘土作品の作品集や画集を多数出版し、海外にまで大きな影響を与えた。福来は、1966年盲児のための『手で見る絵本』をテレビで紹介した。どのような絵本だったのか、残念ながら実物やその画像を現時点で見ることはできないが、福来はこう説明している。「羽子板の押し絵のように説明の絵に厚みをもった童話本ですが、形は盲児独特のもので、一般の絵の引きうつしではありません。盲児の絵の研究から生まれたものです。この絵本は材質は実物と同じか、手ざわりの似たもので物語の人や動物の形にきって台紙にはり、点字の物語をそえたものです。」（福来1969）

２．１．２　親が作った手で見る絵本　1973年

全国視覚障害児を持つ親の会の矢部万寿子は、1973年手で見る絵本（さわる絵本）を作り始めた。「視覚障害児に何とか絵本の世界を楽しませてやれないものか―四年前にはじまった“手で見る絵本”作り。はじめのうちは簡単なものだったが、試行錯誤の中で工夫を重ね、次第に子どもたちのより納得のいく絵本を作り出せるようになった。手でさわって見る絵本―材料によって子どもは暖かさを感じたり、夜の暗さを読み取ったりする。（中略）子どもたちに送りだされた“手で見る絵本”は百冊になった。」（全国視覚障害児を持つ親の会1976）。100冊になった手で見る絵本を、全国の見えない子どもたちに貸し出しをするために、矢部は「こひばり文庫」[5]を開いた。本を借りた子どもたちは、その本を返したがらないほど喜んだというエピソードを矢部はたくさん書き残している（矢部1976）。矢部が作ったさわる絵本がどんなものだったのか、当時盲児を持つ母親らのさわる絵本作りの応援をしていた東京教育大学附属盲学校教諭の下田知江は、矢部がわが子のために『てぶくろくろすけ』（文：川崎洋、絵：長新太、福音館書店1973）を、手で見る絵本に作り直したときのことを、雑誌に書き残している。「長男が幼稚園から持ってかえる絵本を読んでやる。彼はヒザを抱えてじっと聞いている。（中略）すてきな絵をさわってわかるように工夫してみようと考えつく。雪は綿をうすくはり、凍ったスロープにはセロテープをはりつけるというように…。彼はセロテープのスロープを『てぶくろくろすけ』と一緒に滑っていくように声をあげながら指でたどっていく。仲間にいじめられてのびのびのお化けのようになったくろすけの指を１本１本さわりながら、‘あーあ、こんなになっちゃってかわいそう。なおしてあげよう’しばらく、くろすけの上に手をのせている（中略）はじめてこの本を見たときにあげた喜びの声は今でも忘れることが出来ない。」（下田1984）また、1976年11月号の雑誌『母の友』（福音館書店発行）の巻頭カラーグラビアに10冊が紹介されている。先の『てぶくろくろすけ』はその中でも初期の作品だったようで、表紙に絵と同じ色の本物の手袋が貼りつけられている。

２．１．３　ボランティア団体むつき会制作のさわる絵本　1974年

1974年１月東京都品川区内の点訳グループであった「むつき会」で、さわる絵本作りが事業化され、第１作目のさわる絵本の完成は同年11月であった（むつき会2000）。むつき会創立者の加藤千代子はさわる絵本を作り始めたいきさつについて「近くの公民館の夜間講座で点字講習会があった。点字の〈わかちがき〉の練習には絵本が使いやすかったが、絵のない絵本、絵が楽しめないのはさみしいと思った。」と述べている。むつき会の絵本の中に『におうえほん』があるが、これは1976年ごろ自分たちが作ったさわる絵本を盲学校に届けに行ったときに、重い障害のある子どもたちは、その絵本でも関心を持たない姿を見て、思いついたのだという。香料を使ったさわるカードのようなものを作る事は、さほど困難ではないが、１冊の絵本の中に、いろいろな匂いのページを作る事は容易ではなかった。加藤は、香料会社に掛け合い、爪で軽く引っ掻くと匂いが出る特殊なカプセルの

開発を依頼し、ページを繰ると現れる果物の匂いが楽しめる絵本を開発した（加藤1977）。この「におうえほん」は見えない子どもたちに喜ばれ、数パターンの作品が生まれ、全国の視覚特別支援学校に届けられている。また、むつき会はさわる絵本の制作や貸し出しにあたり、図書館との連携を図った官民連携のモデルとしても草分けである。むつき会で作られた絵本は1975年３月から今日まで品川区立図書館が貸し出しを請けおい、品川区内の利用希望者だけでなく、地域の図書館を通じ全国の利用者に貸し出されている。

２．１．４　布絵本の誕生　1975年

妹が寝たきりの障害者であった小林静江は、大手児童書出版社の編集者を経て、念願であった日本で最初の障害のある子どもも利用できる私設子ども図書館を、1982年開設した。そのはじまりは、1970年小林が、江別市の自宅の文庫を障害児専用とし、そこの本の貸し出しや読みきかせをする場所を探し、1973年小樽市立病院小児科病棟に日本で初めての小児患者用図書室としてふきのとう文庫を設置したことである。その開設から約一年が経過した1974年９月に、小林は、全盲で肢体不自由も知的障害も重い２歳の子の母親から、「うちの子は耳は聴こえるようだから、本を読んであげたい」と、適当な絵本の貸し出しを依頼された。また10月には５歳の脳性麻痺の子を持つ親からも「娘にあう絵本がない」と相談される。文庫の蔵書や当時のむつき会の手作りのさわる絵本などでは喜ばないことを知った小林は、1975年ふきのとう文庫内に「障害をもつ子どもと本の会」を発足した。その研究会に米国の主婦が制作した布絵本『Busy Book』が持ち込まれ、その絵本をモデルに『ビーだまいくつ？』という天竺の台布に、フェルトで靴の形を縫い付け、靴紐を結んだり解いたり、風船をスナップではめたりとったり、洋服のボタンをかけたりはずしたりがページの中でできる、楽しい工夫のある布絵本が誕生していった（図１）。同じ年だけで、10点の布絵本を制作している（ふきのとう文庫1990）。

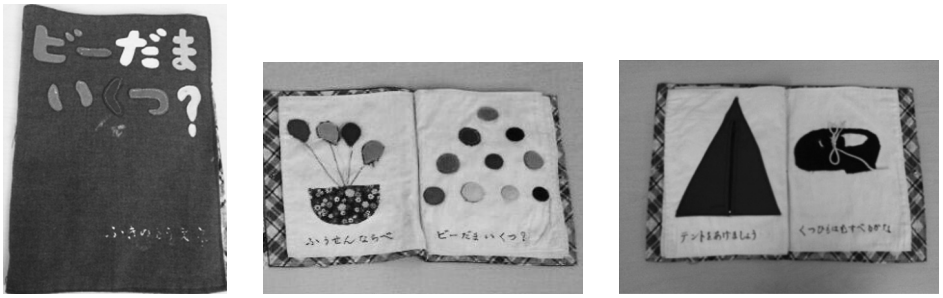

図１　『ビーだまいくつ？』ふきのとう文庫制作　1975

２．１．５　障害がある子にもおはなしの楽しさを。布絵本『ちょうちょう』1976年

児童文学作家の長崎源之助は、布絵本のためのオリジナルなストーリーを考え出し、このストーリーを元に『ちょうちょう』という布絵本ができた（図２）。長崎は当時よこはま文庫の会の会長でもあり、1976年頃から自分の文庫の仲間にも呼びかけて、池上従子はじめ有志で布絵本の制作が神奈川県横浜市でも始められた（長崎1977）池上はその後1981年に「よこはま布えほんぐるーぷ」を結成した。長崎は布絵本にも絵本のたのしさが大

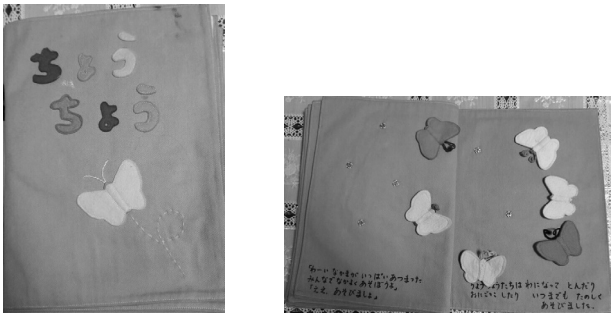

図２　『ちょうちょう』長崎源之助作　よこはま文庫の会制作　1976

事ではないかという思いを次のように語っている。「ふきのとう文庫の小林さんに、『ビー玉いくつ？』をいただいたのが、私と布絵本との出会いです。ジッパーやマジックテープやボタンなどを使った、その絵本の面白さもさることながら、私は布絵本に寄せる小林さんの情熱に心を打たれました。（中略）私たちの発想はあくまで読書（絵本を見る）のたのしさを知ってもらいたいということにありました。それは手の機能の発達訓練用にできていることもすばらしいとは思いますが、ストーリー性といおうか、次の画面とのつながりや、頁をめくるたのしさ、意外性を味わうなど絵本としての要素も欠くべからざるものと考えました。（中略）布絵本には紙に印刷された既存の絵本にない魅力があります。そして、絵本としての可能性もいっぱいもっている新しい分野です。これから大いに開拓していきたいと思います。」[6]

この絵本は大根の葉から飛び出す生まれたての黄色いちょうちょうが、仲間を探す冒険物語で、ちょうちょうや花がスナップでとり外せるようになっている。頁を越えて絵を動かしながら、あるいはストーリーを自分でも作りながら楽しめる絵本である。最後のページは、お友達と輪になって踊ったり遊んだりというシーンになっている。

手作りのさわる絵本と布絵本は海外では1981年の国際障害者年に18か国近くで展示会に出品され、大きな反響をうけた（中島1982）。国内でも1979年から1986年朝日新聞社主催偕成社協力「世界の布の絵本・さわる絵本展」（のちにふれあい広場と改称）が各地で開催され、社会的な周知や作り手の増加が得られた。

２．１．６　『はせがわくんきらいや』1976年

この絵本は、製造過程で砒素の混入した森永ドライミルクを飲んだ「はせがわくん」を描いたものである。1955年に発生した森永砒素ミルク中毒事件の被害者である作者長谷川集平の体験をもとにして描かれており、告発的なシーンも絵本の中にはある。白黒の、子どもが書きなぐったような絵と文字の絵本表現は、当時衝撃的だった。障害の語り方としても、周りにいる友だちがはせがわくんを語るという、当事者の主観をつき離す視点からの表現が、社会を映し出し、そしてそれを超えようとする作者自身の思いをも、逆説的にそこから強く感じる絵本である。日本の現代絵本の中で初めて「障害」が描かれた絵本である。1976年すばる舎より発行され、2003年多くの人のリクエストで復刻版が刊行された（復刊ドットコム発行）。

２．１．７　〈障害者を理解する子どもの本シリーズ〉『指で見る』1977年

当時の偕成社社長今村廣（1987）によると、1974年のボローニャブックフェアで、以前から懇意にしていたイギリスの女性編集者ジュディ・テイラーから「今村さん、私は今こういう本をつくろうと思っている。」と２冊の絵本を見せられ、さらに、テイラーから「私は一般の子どもたちに、もっともっと障害児のことを理解してほしいと思う。それは障害児の為というよりも、一般の子どもたちに、人生をよりよく生きるためにはどうすればいいのかということを考えてもらいたい。売れるとは思わないけれど、長年子どもの本に係ってきた人間として、こういう本を出す義務があるのではないかと考えている。」と話された。今村はその話を聞いて「よし、私もやろう」と決心した。どのような本を作ろうかと探していたときに、1976年の秋、１冊の絵本に出会った。それがスウェーデンのカメラマン、トーマス・ベリイマンのフォト・ドキュメント『指で見る』であった。これはベリイマンが、半年間10人ほどの視覚障害児と寝食を共にして、子どもたちの赤裸々な姿をカメラに捉えた本だった。こうして、1977年〈障害者を理解する子どもの本シリーズ〉（現在は障がい児の生きる姿　フォト・ドキュメンタリーというシリーズ名になっている）の第１冊目として、『指で見る』（写真／文：トーマス・ベリイマン、訳：ビヤネール多美子、偕成社1977）が出版された。

２．１．８　初の商業出版さわる絵本『これ　なあに？』1979年

日本におけるさわる絵本の商業出版は、1979年翻訳出版された『これ、なあに？』（作：イエンセン,ハレー、訳：きくしまいくえ、偕成社）が初となる。この絵本は、絵を隆起印刷したさわる絵本である。原書はデンマークでCo-Production（共同出版）で出版された。印刷技術の進歩として隆起印刷が可能になったことや、スパイラル製本等の技術の進歩などが背景にある。登場人物を視覚的なイメージを必要としない幾何学的な形や手触りの違い（つるつる、ざらざら、しましま、つぶつぶ、バラバラ）で表現し、先天的に見えない子どもたちも、見える

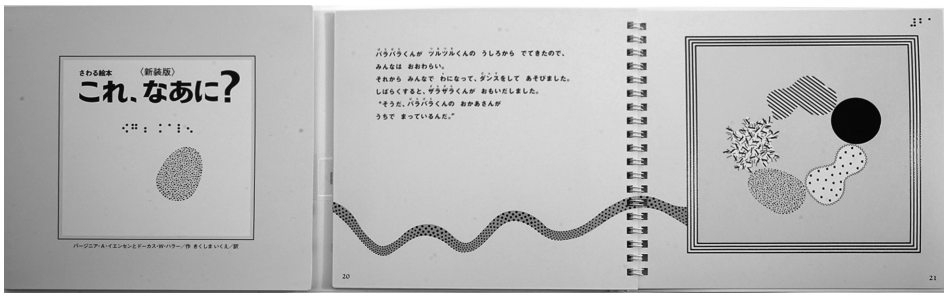

図３　『これ　なあに？』（作：イエンセン、ハレー，訳：きくしまいくえ、偕成社1979）

子どもたちにも楽しい絵本になっている（図３）[7]。このような「絵」を考案したイエンセンは、福来四郎の影響を受けたていた（トーディス1989）。

初版発行当時この本の出版には、偕成社の二人の障害のある子の父親でもあった編集者鴻池守と中島信道が大きく関わっている。『これ、なあに？』が刊行された時のことを、鴻池はこう語っている。「永い間子どもの本の編集に携わって『すべての子どもに読書の喜びを』といいながら、私たちは視覚や聴覚や言語や知能や肢体等に障害のある子どもたちのことを『子ども』の仲間に入れてきてなかったことに気がつかされた。そのきっかけは、私に重度の知恵遅れの息子がいたことと、ふきのとう文庫の小林静江さんやむつき会の加藤千代子さんに出会ったこと。小林さんは紙ではなく布で作ったスナップやマジックや紐、ボタンなどをかけたりはずしたりしながら遊び学ぶ布の絵本を、加藤さんは視覚障害児のために絵をさまざまな素材で表現し手作りしたさわる絵本を持って私の前に現れた。それらの絵本はどれも『印刷できない本』だった。それは編集者として、人間として、私への大事な提案となり、だからこそ、海外で、この印刷できるさわる絵本と出合った時、その思いの結実として翻訳出版を実現した。」[8]中島はこの本の広報を手掛けた。本に挟み込まれたパンフレットには「目の見えない子も、見える子も、一緒に楽しめる世界で初めての異色の絵本！！」「目の見えない子と 見える子の 心のかけ橋となる 画期的な絵本」と書かれ、見えない子と見える子が一緒にこの絵本を楽しんでいる写真が掲載されている。

２．２　1980～2002年に成立したバリアフリー絵本

２．２．１　知的障害児施設止揚学園の絵本『ボスがきた』1980年

この本は、知的障害の子どもたちが絵を描き、ストーリーの主人公になっている。出版のいきさつを止揚学園の園長福井達雨は「この本が生まれる１年ほど前、偕成社から多くの子どもが愛している絵本『ノンタン』を世に出し名編集長と言われる鴻池守さんが、止揚学園に来て、初対面の私に『偕成社は障害者を理解する子どもの本を出版してる』と東京弁で滔々と話し始めました。あまり東京弁が好きではない皮肉屋の私です。『偕成社が出している本はみんな外国のもんや。日本の障害者が書いた本は１冊もあらへん。日本人のものを出して、障害者の本を出したと言ってほしいなあ』とぶつけてしまいました（中略）『それだったら、福井さんが重度の知能障害の子どもたちと絵本を創ったら』と鴻池さんの提案で（絵本作りなんかしたこともあらへん）と、私は迷ったのですが、鴻池さんの強力な説得に押し切られ、生まれたのが、絵本『ボスがきた』なのです。」と述べている（福井2009）。止揚学園の絵本はこの後10冊が刊行されている。

学園の名前の「止揚」とは哲学用語で、ふたつの全く異なるもの同士がぶつかり合い、より高い次元へ到達し、新しいものが生まれるという意味で、創立者の福井が知的に重い障害がある学園の仲間たちが、障害がないとされる福井たちと互いにぶつかり合い、認め合い、支え合って「共に生きる場」をつくっていきたいとの願いから名づけられた。1970～80年代養護学校義務化をめぐる反対運動の中で、この共生の思想は運動を支えるものともなっていた。

２．２．２　わが子に絵本を読んであげたい。「てんやく絵本」の誕生　1981年

北九州市出身の岩田美津子は先天性緑内障で、幼少期はわずかながら見えていたが、盲学校高等部に進学した頃には、眼球摘出もあり全盲となる。大阪で結婚した後、ふたりの子の母となる。岩田は「今から40年前、１歳

を過ぎた長男と一緒に絵本を読みたいと思ったとき、周囲を見渡してもその願いに答えてくれる絵本は皆無だった。当時見えない子どもたちのために、ボランティアで手づくりされている『さわる絵本』や『布の絵本』は少しずつできはじめていたが、わが子は晴眼である。誰もがあたり前のように、図書館や書店で手にいれた絵本を楽しんでいるように、私も我が子とたのしみたいと思った。」と述べている（岩田2018）。そこで岩田が利用していた、大阪の手作りさわる絵本の制作団体「つみき」のボランティアたちと、一般に市販されている絵本の文章を塩化ビニール製の透明なシートに点訳し、原本の活字部分に貼付し、また、同じシートで絵を象って貼りこみ、さらに点字で簡単な説明を書き添えた「てんやく絵本」の作成を1981年頃はじめた。「てんやく絵本」が、100冊を超えた1984年、岩田は自宅で「岩田文庫」を開設し、全国の見えないお母さんたちにも貸出をはじめた（岩田1992）。1991年岩田文庫は活動拠点を大阪市西区に移し、名称を「てんやく絵本ふれあい文庫」と改称した。

２．２．３　手で見る学習雑誌『テルミ』創刊　1983年

1983年に国内唯一の点字学習雑誌『テルミ』が創刊される。創刊号から『テルミ』を制作していた田中（2018）によると[9]、子ども向けの点字雑誌を構想中の小学館の相賀昌宏と、見えない人と関わり合うことを目指す美術作品を個展で発表していた田中が出会い、この雑誌の創刊に向けて二人の編集会議がスタートしたという。読書の対象は全盲から弱視、先天性から中途の失明まですべての視覚障害で、10歳ぐらいの年齢層とし、テーマは「形」とした。見えない子どもたちにとって、形を知る機会は限られ、特にさわれないものの形はわからない。形を絵と文章で伝えることを、大きな狙いとした。雑誌名は「手で見る」の語順を変えて『テルミ』と命名した。その当時開発された発泡印刷の技術をつかい、点字や絵の隆起印刷をした。1983年創刊以来35年間、２か月に一度の隔月発行で、価格は当時から変わらぬ現在も400円である。

２．２．４　手話絵本『音のない川』1994年

手話イラストが付いた絵本『音のない川』（作：サラ・バーテルス、絵：キャサリン・ヒューイット、訳：松井たかえ、BL出版）が1994年に翻訳刊行されている。そのあと、『あいうえお絵じてん―手話・指文字入門（はじめての手話絵本）』（文：矢島忠男、絵：南波昌子、手話振り付け：丸山浩路、偕成社1996）が出版されていく。『じゃあじゃあびりびり」（作：まついのりこ、偕成社1983）には「手話で絵本を！」という冊子が1996,7年頃作成され希望者に無料で配布された。これには以下のようなエピソードがある。

ある日、偕成社編集部に手紙が届いた。一人の聴覚障害があるお母さんからで、その手紙には、「私には、ここに書かれている‘音’が理解できません。どんなふうに読んであげたらいいのでしょうか？」と書かれていた。この母親のために、編集者鴻池は、この絵本に手話をつけることに取り組んだ。1996,7年頃のことで、当時はまだDVDという手段がなく、スタッフは、手話指導の鈴木智弘の手話を莫大な数の写真やビデオに収め、一つの手話のどの場面を絵にしたらいいのか、苦労を重ね試行錯誤を繰り返し、まついのりこの絵本のキャラクターである「おばけのぴーちゃん」を使い、手話を絵にし、長い時間をかけて、「手話で絵本を！」という冊子を完成させた（攪上2013）。まついは、後年「私は自分の子どもにつくった絵本によって、子どもが真に喜ぶことは、すべての人間の生きる原点なのだと知りました。ですから、『じゃあじゃあびりびり』は障害のある子も、無い子も、すべての子どもたちが受け入れてもらえると思い、手話の『じゃあじゃあびりびり』をつくったのです。」と言葉を残している[10]。

２．２．５　国内初の点字つきさわる絵本『チョキチョキチョッキン』1996年

1996年こぐま社より、わが国初のフルカラーの点字つきさわる絵本『チョキチョキチョッキン』（作：ひぐちみちこ・いわたみつこ、発行：ふれあい文庫）が出版された。この絵本は、てんやく絵本ふれあい文庫の岩田美津子の「図書館や書店の棚に見える人と同じように、見えない私たちも楽しめるカラフルな点字がついた絵本が並んでいてほしい」という願いを印刷会社やこぐま社の協力で実現したものである（岩田2015）。岩田はその後この絵本のような点字つきさわる絵本の出版を増やしていくためには、出版社の枠を超えた連携が必要と考え関係者に呼びかけて2002年４月「点字つき絵本の出版と普及を考える会」を発足した[11]。

２．２．６　スウェーデンの絵文字つき翻訳絵本　2002年

『山頂にむかって』『リーサのたのしい一日―乗りものサービスのバスがくる』(文：スティーナ・アンデション、写真：エバ・ベーンリード、監修：藤澤和子、訳：寺尾三郎、愛育社2002）この２冊は、絵文字や写真を使うことで、字が十分読めない人たちも内容がわかるように工夫されている。日本に始めて、絵文字が入ったこれらの絵本を紹介した藤澤和子は以下のように述べている。「私は、知的障害や自閉症、脳性まひ等の障害によって話すことが難しい人々が、コミュニケーション手段として使用するためにカナダで開発されたPICシンボル（ピクトグラム、絵記号とも呼ばれる）[12]の日本版を作る研究と実践を、1990年頃から始めていました。（中略）PICシンボルは、スウェーデンで発展していたので、1996年に、スウェーデンの施設や学校を訪問し、シンボルが実際に利用されている現場を視察しました。そこで、絵や写真が多く使われている本を見かけました。絵本のように絵がたくさん使われているけれど、子ども向きの絵本ではない、はじめて目にする本でした。」（藤澤2018）藤澤が初めに紹介したスウェーデンの翻訳絵本は、対象が子どもではなく、文字を読むことに困難がある人たちのために、絵文字があるというだけではなく、文章は短くやさしく読めるもの、文と絵（写真）の一致、本の装丁に子どもっぽいものはつかわない等々、ほかの配慮もある。

図４　『リーサのたのしい一日』（文：S.アンデション、写真：E.ベーンリード、訳：寺尾三郎　愛育社2002）

３．まとめの考察

前章において、1960～2002年のバリアフリー絵本成立史とその解題をみてきたが、成立史として一覧表にまとめると、表１のようになる。

バリアフリー絵本の黎明は､1960年から70年頃である。この頃､子どもを取り巻く絵本環境は黄金期に入り､「絵本ブーム」と呼ばれた時代である（鳥越2002)。いまある絵本では、その楽しみに参加できない子どもたちに気がついた親や教師や当事者たちと、それに協力するボランティアたちの手で、試行錯誤でバリアフリーデザインの絵本が、まず手作りで制作されていった。

表１から、1970年代から1980年代に、成立が集中していることがわかる。時代背景として1975年の障害者の権利宣言から1981年の「完全参加と平等」をテーマに掲げた国連の国際障害者年前後の、障害者の権利意識や関心の高まりが関連していると考える。

手作り絵本はそれ以後も、日本のバリアフリー絵本を支えてきているが、これは日本独特の歩みであり、それは一方で、国の応援や先導はなかったことを示唆している。出版本の場合は、海外の翻訳ものからバリアフリー絵本がスタートしている。手作りのさわる絵本や布絵本は、日本から海外に発信されていったが、手話や絵文字の絵本は、海外から日本に紹介されて入ってきていることも明らかになった。その後の発展や改良はあるが、今日本に在る主なバリアフリー絵本は2002年ごろまでに成立している。

前の絵本制作が、次のバリアフリー絵本の制作や発行に影響を与えている関係も解題された。布絵本創始者のふきのとう文庫の小林は、当時ボランティアとして手作りのさわる絵本を事業化したむつき会の加藤のさわる絵本制作に影響を受けている。そしてむつき会のさわる絵本やふきのとう文庫による布絵本の成立は、初の商業出

表１　バリアフリー絵本設立関連略年表

2022.9筆者作成

年	バリアフリー絵本	世界の関連の動き	日本の関連の動き
1950		北欧ノーマライゼーション(50年代～) IBBY(国際児童図書評議会)設立(53)	岩波子どもの本シリーズ・月刊こどものとも創刊(56～)
1960	福来四郎　手で見る絵本制作(66)	米国自立生活運動(68～)	
1970	こひばり文庫さわる絵本の貸し出し(73) むつき会さわる絵本制作事業化(74) ふきのとう文庫布の本『ぴーだまいくつ？』(75) 『はせがわくんきらいや』(76) 布絵本『ちょうちょう』(76) 『指で見る』(77) 『これ、なあに？』(79) 『ボスがきた』(80)	国連精神遅滞者の権利に関する宣言(71) 国連障害者の権利宣言(75)	絵本黄金期(70年代) JBBY(日本国際児童図書評議会)設立(74) 養護学校義務化施行(79) 手作り布の絵本さわる絵本展(79－86)
1980	テルミ創刊(83) 岩田文庫(84)	WHO国際障害分類(80) 国連国際障害者年(81) IBBY障害児図書資料センター設立(85)	
1990	『音のない川』(94) 『チョキチョキチョッキン』(96) 『みそ豆』(98)	子どもの権利条約(89) アメリカ障害者法(90) サマランカ声明(インクルーシブ教育の原則)(94)	小さな凸の提案(90)➡共遊玩具 子どもの権利条約批准(94) 「学校教育法施行規則改正(通級制度)」(98)
2000	『山頂にむかって』(02) 『リーサのたのしい一日』(02)	WHO国際生活機能分類(01)	バリアフリー絵本展巡回(02)点字つき絵本の出版と普及を考える会(02～) 世界のバリアフリー絵本展巡回(03～　)

版によるバリアフリーデザインのさわる絵本『これ、なあに？』の翻訳出版を促した。さらにこの原書は国境を超えて日本の一盲学校教師の影響があった。岩田のてんやく絵本は当時大阪で作られていたさわる絵本の考え方や作り方の影響を受けている。さらに岩田の『チョキチョキチョッキン』はやがて、点字つきさわる絵本の出版と普及を考える会の設立につながり、点字つきさわる絵本出版の大きな前進を生み出している。

４．本論文の意義と課題

絵本は日本で育つ子どもたちにとっては、現在普遍的な、皆がその喜びを享受できる文化財である。絵本を読むこと、楽しむことは、そこに紡がれている物語や世界に参加していくことであると考える。参加することに障害があった子どもたちに、絵本がどうまなざしを向け、その子たちが参加できる絵本が作られていったのか、その歩みは、絵本を通じて、共に育ち、共に生きる社会を作っていく歩みにほかならない。絵本に描かれている世界や社会は、その時の共生社会の成熟度のバロメーターでもあろう。日本の子どもの文化として、絵本の歴史として、障害がある子どもたちもその受け手として認められていったバリアフリー絵本の歴史を明らかにできたことの意義はあると考える。そしてバリアフリー絵本成立に尽くした人たちの努力に、敬意を表したい。

本論文では成立に焦点を絞った歴史をたどり、そのエピソードなどの記録に留まっている。バリアフリー絵本には、その後発展や課題を抱えながらの歩みがあるが、経過をたどり、その意味を明らかにすることは、今後の課題とする。

【注】

1　「世界のバリアフリー絵本展」とは、子どもの本の世界のネットワークIBBY（International Board on Books for Young People）の障害児図書セレクションの展示会である。この展示会の原タイトルは、“Outstanding books for Young People with Disabilities”であったが、日本では、「世界のバリアフリー絵本展」というタイトルにした。またそれに先立って2002年国内の障害のある子どもたちの絵本を集めた展示会も「バリアフリー絵本展」と名付け国内を巡回した。筆者は両展示会実行委員長を務めている。

2　このほか、テキストの文字のみ点字にした点字絵本や点訳絵本とよばれているもの、絵や字を模写拡大した拡大写本などもある。本研究では「バリアフリーデザイン」の工夫がある絵本を研究対象とする。

3　注２でも記したように、てんやく絵本と似た名称の点訳絵本というものがあるが、これはテキストの文字のみを点訳した絵本である。てんやく絵本は、絵の部分にも透明シートが絵の形に象られて貼られ、そこにさらに絵本にはもともとは書かれていない絵の説明が点字で書き足されている。しかしこれらの名称表記の使用の不統一や混乱はある。てんやく絵本の開発普及者が点字使用者だったために、墨字になった場合のひらがな書きと漢字書きの区別のなかった時期もみられ、てんやく絵本を、点訳絵本と記している資料もみられる。

4　巻末の年表は1868～1959年まで。1960年からは冊数が膨大になるために作成されていない。

5　資料によっては「子ひばり文庫」という表記になっているものもある。

6　『手作り布の絵本』（ふきのとう文庫編著　偕成社1979）に挟み込まれた「布の絵本・さわる絵本のひろがりを求めて」というパンフレットに、長崎源之助が寄せている文章「絵本のたのしさを」から引用。

7　『これ、なあに？』は、2007年新装版で再刊された。

8　これは、鴻池守「印刷の可能性を拡げる視覚障害児の絵本―ビジュアルからアンビジュアルへ―」印刷文化論３，NO57の掲載記事から引用。発行年度が不明。同様な発言が2005年国立国会図書館国際子ども図書館で開催した「読書の楽しみをすべての子どもたちに」シンポジウムの記録にも残っている。http://www.kodomo.go.jp/event/event/pdf/symposium.pdf（2022.8.1閲覧）

9　現在田中は引退し、絵本作家のスギヤマカナヨにデザインは交代している。

10　この文は筆者の求めに応じ、2012年病床に臥せっていたまついのりこさんから、ご家族がこの絵本に手話をつけたときの思いを尋ね、文字にしてくれたものである。

11　この会の後押しで、2022年11月現在には30冊近い点字付きさわる絵本が出版され、書店や図書館に並ぶようになった。

12　絵文字にはPICシンボのほかにも、ブリス・PCS・Wigdit・作者のオリジナルなど様々なものがある。日本で最初に紹介されたのは、PICシンボル（ピクトグラム＝絵文字）のついた絵本である。

【文献】

ふきのとう文庫, 1990,『春を呼べ！ふきのとう（財）ふきのとう文庫15年のあゆみ』偕成社.

福井達雨, 2009,「絵本「ボスがきた」が生まれました」『湖畔の声』1105号.

福来四郎, 1996,『見たことないもん作られへん』講談社, 140-144（著者のプロフィール欄）.

藤澤和子, 2018, ハートフルブックHP〈連載〉LLブックとの出会い https://heartfulbook.jp/Article/4/ 2022.8.27閲覧.

林左和子, 2012,「公共図書館児童サービスとユニバーサルデザイン絵本」静岡文化芸術大学研究紀要12巻, 59-66.

今村廣, 1987,『偕成社五十年の歩み』偕成社, 135-144.

岩田美津子, 1992,『見えないお母さん絵本を読む―見えるあなたへのメッセージ」せせらぎ出版.

岩田美津子, 2015,「ふれあい文庫三十年の歩み」こどものとしょかん146, 東京子ども図書館.

岩田美津子, 2018,「すべての親子に絵本の喜びを―てんやく絵本ふれあい文庫の活動」児童図書館研究会『年報こどもの図書館2017年版』日本図書館協会, 52-56.

攪上久子, 2006,「日本のバリアフリー絵本―その現状と可能性―」絵本学研究紀要No 8, 絵本学会, 61-68.

攪上久子, 2013,「じゃあじゃあびりびり」子育て支援と心理臨床Vol 6, 福村出版.

攪上久子, 2019,「日本のさわる絵本開発のプロセス」お茶の水女子大学子ども学研究紀要 第７号, 47-56.

加藤千代子・望月 梨枝子, 1977,「盲児のためのさわる絵本づくり―品川区・むつき会の活動」（地域と子どもと図書館〈特集〉）月刊社会教育 21(10)，44-49.

国立国会図書館国際子ども図書館, 2005, https://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/pdf/chrono.pdf　2022.6.25閲覧.

光野有次, 1998,『バリアフリーをつくる』岩波書店, 38-40.

むつき会, 2000,≪むつき会≫の‘あゆみ’.

長崎源之助, 1977,「地域文庫の活動」横浜調査季報53.

中島信道, 1982,「布の絵本・さわる絵本の海外での反響」JBBY会報No 23.

下田知江. 1984,「ボランティア西・東　さわる絵本づくりにはげんでいる人たち」視覚障害―その研究と情報No 73.

田中喜代司, 2018,「手で見る世界を描く◇視覚障害の子供向け雑誌「テルミ」創刊から35年製作◇」日本経済新聞2018年10月10日朝刊42面　投稿記事.

鳥越信編, 2002,『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ』ミネルヴァ書房, 165.

ウーリアセーター, トーディス, 1989, 藤田雅子・乾侑美子訳『本はともだち』偕成社, 49.

矢部万寿子, 1976,「手で見る絵本をつくって―こひばり文庫４年間の歩み―」母の友11月号, 福音館書店, 22-27.

矢部万寿子, 1977,「手でみる絵本」こどもの本３, 日本児童図書出版協会, 2-4.

ユニバーサルデザイン研究会編, 2001,『ユニバーサルデザイン　超高齢化社会に向けたモノづくり』日本工業出版, 3-4.